

特集 “助け合う” 防災教育

～体験と学びが学校・家庭・地域をつなぐ～



平成23年3月11日に発生した東日本大震災を踏まえて、東京都教育委員会では、「まず自分の命を守り、次に身近な人を助け、さらに地域に貢献できる人材」を育成する防災教育を推進しています。

いつ、大震災が起きるかわかりません。しかし、事前に備えることで、自らの、そして家族や多くの人の命を救うことができることを、私たちは過去の体験から学びました。個人や家庭での取組とともに、地域防災力を高めるためには、地域のつながりを作り、様々な場面で繰り返し学び体験する機会を作っていくことが大切です。



今号は、「防災教育」をテーマに、地域や学校で防災教育を実施する時にヒントとなるような情報や、外部団体と連携して実施した事例、都立高校での事例を掲載します。

この他にも、外部団体と連携した防災教育プログラムの紹介や、支援団体の情報等については、東京都生涯学習情報の下記のホームページに掲載しています。

地域教育推進ネットワーク東京都協議会 地域・団体連携協働部会

最初に、神戸学院大学人文学部の船木伸江准教授に講師をお願いした研修会の報告として、神戸学院大学で取り組んでいる防災教育について御紹介します。

防災教育 体験と学習を重ねながら

～神戸学院大学 防災・社会貢献ユニットの取組～

神戸学院大学の防災・社会貢献ユニットは、阪神・淡路大震災10年目に、震源地に最も近い総合大学として社会に教育の分野から貢献することを目的に設置されました。大学の人文・社会科学系4学部（法律、経済、経営、人文）の学生を対象に、2年生から4年生まで、50人を限定してプログラムを展開しています。



日本でこれまでに起こった災害を振り返ってみると、阪神・淡路大震災は朝早くに起きました。新潟県中越地震は土曜日、中越沖地震は休日など、学校に生徒がいない時間に起こっています。学校のある時間だったら、どうしますか。東京で、高層ビルがあり、電車が走っているところで大震災が起こったら、もしくは東日本大震災よりはるかに広い範囲で起こったらどうしますか。どのような状況でも対応できる能力を身につけるためには、どのような学習が必要なのでしょう。

大学の授業では、神戸市の職員の方、人と防災未来センターの方、語り部の方、研究者、JICAやNPOの方など、色々な方から話を聞きます。何が起きたのかを知り、知識を得ることも大切ですが、どのようにその知識を使えるものとするか、それは誰かに教える、ディスカッションするなど、応用の繰り返しで学習は深まっていくのではないかと考えています。学生たちは小中高校の授業で指導したり、被災地のボランティアに行ったりなどの活動をしながら、自分たちがどのように社会に貢献できるか考え、大学で学んだ知識を実際に使うことで、知識が深まっていきます。

今回は、授業や地域での学習会などで使っていただきたい体験型のゲームを、2つ紹介します。

体験型ゲーム① クロスロード

阪神・淡路大震災の経験を聞いていく中で、対応した人は、その時々非常に難しい選択をしたことがわかりました。この難しい選択を体験してもらうゲームです。テーマは「ジレンマ」。いろいろなルールで実施することができますので、ここでは1つの方法をやってみましょう。

- ① 奇数人数のグループに分かれ、「YES」と「NO」の札を各自に1組ずつ配る。
- ② 出された問題に対して、それぞれ「YES」か「NO」かを決め、札を裏返して机の中央に置く。
- ③ 合図で一斉に表に返し、多数派の回答を選んだ人にポイントがつく。
- ④ ただし、一人だけの回答になったら、その時は一人になった人にポイントがつく。これは、災害時は、弱者の声が少なくなってしまう、そのような人の声もきちんと聞いていきましょう、という意味を込めている。
- ⑤ ポイントをつけたら、この答えにした理由や、全員が同じ答えであれば何に迷ったかについて、グループの全員が話す。

この流れに加えて、グループで話した後に全体に発表し、黒板に書いていくこともあります。同じ場面について、人によって色々な立場や考え方があり、必ずしも一概に正しいと言えることはないこと、そして、理由を聞いて、あ、そういうこともあるのか、と自分の意見が変わることもある、ということを知ってほしいからです。

「色々な人と協力し、配慮しあって暮らしていくためには、お互いの考え方や思いを尊重し、時には譲歩しあいながら考えていかなければならない。」というまとめとした小学校がありました。また、「災害時は、答えは一つしかないわけではない。」というまとめにすることもできます。このゲームの活用法についての本が出ていますので、是非参考にしてください。

問題例

あなたはペットとしてゴールデンリトリバー(もも メス3歳)を飼っています。大きな地震があり、避難所である小学校の体育館に避難しなければならなくなりました。一緒に犬を避難所に連れて行きますか。この問題は、避難所について学んだ後に実施すると、イメージがつかめ、発想が広がっていくと思います。

体験型ゲーム② カードで学ぶ非常持ち出し袋

防災・社会貢献ユニットの学生が作成した防災教育教材で、絵も学生が描いています。

- ① 非常持ち出し袋の中身カード1セットと、持ち出し袋シートを各班に配る。
- ② 救援物資が運ばれてくると言われている3日間を生き抜くために必要なアイテムを9個、話し合いながらカードの中から選び、袋シートの上に置く。
- ③ 班ごとに何を入れたか、なぜそれを選んだか、何と迷ったか等を紹介する。選んだ物がどうして必要かを説明する。

カードの裏には、阪神・淡路大震災体験者の聞き取りから得られたアイテムについてのコメントが書いてあります。また、スペシャルカードがあり、キットのカードに無い物も入れることができます。

このゲームは、身近な物がカードになっているので、全員が参加しやすく、また、9個という制約があることで、考え、悩み、判断する、という当事者になることができる優れたものだと思います。この他にも、学生が作った教材を大学のウェブサイトで紹介しています。

神戸学院大学では、実際に学生たちがこのゲームで選んだグッズで3日間過ごせるか、というキャンプを行いました。飲食物は1アイテムとして、自分で持ち歩ける量で他に8つのアイテムを持ってきました。キャンプは、空き缶を拾ってきて空き缶コンロを作ったり、ダンボールをもらいに行ったり、学校の避難所運営を体験した先生から話を聞くなどの内容でした。暗い中、夜の寒さを体験し、自主的に考えたアイテムで過ごす3日間に、学生たちはとても多くの感想を寄せました。

「トイレに行きたくないので、水を飲む量を減らした。体調を崩す人がいることがわかった。」「仲間だから良かったが、全く知らない人だったら、すごいストレスで寝られなかった。」「非常持ち出し袋の中身を改めて考えた。」「カンパンだけで過ごしたが、意外と大丈夫だった、でも喉が渇きます。」など、自分たちで考えて内容を作ったことにはかなり意味があったと思います。



災害時、正しい答えや、唯一の答え、どこの避難所でも通用するルールはありません。皆で考え、皆の知識を引き出すことが大切になってきます。紹介したのは、話し合いながら答えを導き出したり、答えを作る、という教材でしたが、考え、話し合う中で判断力が養われるのではないかと思います。

そして、高校生が防災教育を学ぶならば、是非教える側に立つという経験も入れてください。小学生と一緒に防災キャンプをするなど、自分が参加をする、興味のあることをやっている、そういう楽しさ、知的好奇心をくすぐられる面白さも入れながら防災教育を進めて

防災教育で大切なこと

- ① 「訓練・練習」 → 正しい行動を身につける
- ② 「知識をつける」 → 知っている → 備え、正しい判断
これらに加えて、想定外に備えて
- ③ 「自身が考え、判断する」 考える → 自身で判断 → 臨機応変な対応
- ④ 「助け合いの気持ち」 → 共助の精神



非常持ち出し袋に入れる9つのアイテムを考える

いってほしいと思います。被災の体験を聞くことは、決して楽しいことではありません。ただ、いろいろなチャンネルから学ぶ中で、少しずつ防災の知識が定着していくのではないのでしょうか。

知識を教えるだけではなく、「考え始める」きっかけも与えたい、と思っています。